SPECIAL TALK

創刊号記念対談

◉スペシャルトーク

高度先進医療の推進と地域医療の充実

～開かれた医科大学を目指して

國松 善次 滋賀県知事 × 小澤 和惠 滋賀医科大学学長

■司会 北嶋 和智 滋賀医科大学 耳鼻咽喉科 教授

滋賀県知事
國松 善次

滋賀医科大学学長
小澤 和惠

確かな基礎を築いた着実な四半世紀の歩み

北嶋教授　滋賀医科大学は今年の10月で開学25年になります。滋賀県の医療の増進という建学の精神が、ややもすれば薄くなりかけた時期がございまして、ここ数年、もう一回これを見直そうということで、知事はじめ県の皆様方には、多大のご支援をいただいているわけでございます。

小澤学長　私が7年前にここへ来て驚きましたことは、滋賀医科大学というのは、県とか病院協会、医師会から孤立したような環境でしたものですから、知事にいろいろなことをお願いしまして、特にネットワークの作成には本当にいろいろご努力をしていただきました。

　最近は県を初め病院協会とか医師会とうまく連携できるようになってきておりますので、この辺で地域に徹底的に貢献していこうと考えているわけです。

北嶋教授　そのあたり、知事のご感想はいかがですか。忌憚のない話をお聞かせください。

國松知事　今のお話は、小澤先生が副学長兼病院長、私が健康福祉部長時代のことで、そもそも健康福祉部としては、医大の開設準備事務局を作って県がむしろ無理を言ってお願いした大学でありますし、開設当初の思いがその後十分生かされていなかったという点があったかもしれません。しかし、いろいろなお話を聞かせていただいて、ごもっともなお話ばかりだったので、当時としては私も精いっぱいやらせていただきました。

　やはり四半世紀を経過して、例えば多くの卒業生に県内でご活躍いただいたり、あるいは大学の先生に県の医療行政の中で学識経験者としてさまざまな形でご活躍いただいたりしているわけですから、それなりに時間がたったことのマイナスと同時にプラスも着実に出ていると思います。そういう節目の年を迎えて、この際もう一度お互いに原点に立ち返って、連携プレーを推進していきたいと思っています。

小澤学長　現在、私どもの卒業生は１８００余名で、そのうち７３０名ぐらいは滋賀県にいます。１期生は年齢的に42～43歳になりまして、大きい病院の中核になるべきはずなんですが、どうしても大きい病院は京大とか府立医大とかが押さえておりまして、各大学とも譲れないところで本学卒業生がある一定以上に上がれない仕組みになっています。

　そこで着任したときに各病院をまわって、試験制度でよい医者を取っていただくというような提案をしまして、大津日赤とかへ入れていただきました。これはもう医学の世界の縄張りといいましょうか、なかなか上に上がれないシステムがございまして、それが今本学にとって一番大きな課題です。

國松知事　拠点となる病院を増やしていくことが大事なことだと思います。

北嶋教授　先ほどもお話に出ましたが、地域医療といいますか、市民への医療サービスにはいろいろ努力をして

SPECIAL TALK

開かれた医科大学を目指して

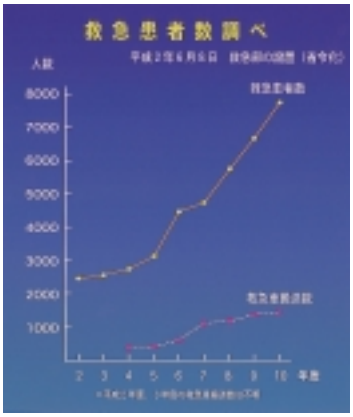
おりまして、今までも市民と直接の対話などをやっております。

小澤学長　最近目立って誇れますのは、ほとんど動いていなかった救急部を手直しして引っ張ってまいりまして、これだけの伸び率で救急患者を受け取ってきました。

北嶋教授　救急車による搬入患者数は、千床近いところも含めて42ある国立大学のうち平成9年度は3位、平成10年度は5位です。

小澤学長　救急医療に関しては、非常に大きく貢献しうる段階になったと思います。それから、大学で毎年、市民に公開講座とかを開きまして、啓蒙を尽くしているわけです。

　特に私たちが誇っていますのは、恐らく日本で初めてだと思うんですが、



呼吸器をつけたような重症の患者さんをモニターで24時間見ながら、自宅でケアをする継続看護を始めたことです。

國松知事　滋賀医大というのはどういう大学なんだということをさまざまな形で、県民自身が肌で触れて知る機会ができて一定の基礎ができたと思います。次の時代に入る種が一応蒔かれたということでしょうから、あとはそれを確実にしっかり育てていく時期に来ているのだと思います。

　もう一つは、救急医療でそういう実績をつくっていただいているのは、これはもう一番患者さんがよく知っているわけですね。そこになぜいるかといったら、やっぱり医療技術が優れていて安心できるからで、現に厚生省の特定機能病院としてのきちっとした位置づけをされています。

期待される福祉への前向きな取り組み

國松知事　滋賀県は知的障害者や重度障害者の問題で、全国的にも評価される歴史を持っています。滋賀医大には、看護学科もできたわけですから、福祉を大事にする医大として、ぜひ障害者の医療を大事にすることを心掛けていただきたいのです。

　私どもが県政で「四つの実験」という中に、福祉の実験ということを言っていますが、ハンデを持ったときにも人権を大事にしたい、そういう県をつくりたいと思っているわけです。病気やけが、あるいは体が十分機能しない状況になったときに、今までは特定の施設でなければならなかったのを、できる限り住みなれたところで生涯を通して生きられるような方向で進めていきたいということです。

　特に福祉の面で、滋賀医大の役割を他の医大にない特色のあるものにしていただけると、県政と非常に呼吸が合います。そして、七つの福祉圏域をもとに、保健・福祉・医療をできるだけ自己完結できる仕組みを作るために、大学は拠点病院なり、医療の情報提供なり、あるいは連携プレーのシステムの中で、地域ということを大事にし、障害を特にターゲットにしていただきたいと思います。

小澤学長　私自身もそういう方向しかないと考えております。今、大学全体でいろいろ検討しておりますし、いろんな率直なご意見を賜って進んでいきたいと思っています。

國松知事　そういうことを目指すとなれば、行政と大学の連携プレーがよりうまくできますし、拠点づくりもやりやすいと思います。卒業生のことも含めて、滋賀の地域づくりの中でも医療分野の特色づけと足場を確実にしていただくという意味で、非常に明確にできるのではないかと思います。

小澤学長　この10月に開所したインターメディアセンターは、滋賀県の大小さまざまな病院から、またこのセンターから医療のいろいろな情報の拠点にしようというものです。初めはサービス機関になりますけども、滋賀県の医療全体に関して情報を提供していこうということです。

國松知事　平成7年、8年でしたか、医療情報ネットワークで心電図の電送システムというものも始めていただいて、それをさらに強力なものにしていくということでは大変期待がされると思います。

小澤学長　衛星通信が文部省から予算化されまして、ネットワークと衛星通信を利用して地域医療へ取り組もうとしています。

國松知事　それはおもしろいですね。

小澤学長　医療の内容も最近どんどん変わってきまして、今までは外科で手術するといいますと大きく手術しましたが、今は半数以上は内視鏡で簡単に手術して、日帰りで退院できる時代に入ってきました。滋賀医大も、そういう方向に向けて変わっていかなければならないと思っています。

北嶋教授　今までと全然違うイメージで手術しますので、センターを開設して若いドクターを訓練しています。

小澤学長　もう心臓のバイパスも内視鏡でやれる時代が来ています。ドイツではロボットでやっているんですよ。そういう時代がすぐそこへ来ています。

北嶋教授　内視鏡を3本ほど入れまして、完全にロボットを使って、ちょうど放射線物質を扱うような感じで、術者は別のところでモニターを見ながら手術をします。

　年を取って手が震えたり目が悪くなっても、その人が獲得した医療技術をずっと生かせるというメリットがあります。現在のところは随分お金がかかりますが、将来はそういう方向に進むと思います。

SPECIAL TALK

開かれた医科大学を目指して

小澤学長　今回、目玉が一つございます。MRTといいまして、普通は画像だけ見ていたのが、画像を見ながら同時に安全に手術ができる機械です。世界で今10台ぐらいなんですが、4年間粘り、その1台が滋賀医大に入りました。日本で本学が最初です。

　新年早々もう作動させますが、画像を見ながら複雑な手術も簡単にできる時代になります。これを十分に生かして大きく飛躍していこうと思っています。

國松知事　それは楽しみというか、非常に明るい話ですね。

北嶋教授　これは内視鏡手術と同じような線上にありまして、立体的に三次元で、今どこを触っているか、ダイレクトで見えるわけですから、昔のように大きく切ってダッとやる必要がないわけです。

小澤学長　脳、肺、肝臓、腎臓、何でもできるのですよ。

國松知事　すごい進歩ですね。それも技術の最先端でしょうから、その技術を医療教育の中に当然生かしていただくということですし、同時に地域とのネットワークで医療機関の現場にそれがうまく資源として生かせるようになると、なおすばらしいですね。

小澤学長　ぜひそういう形で、お互いに情報交換しながらやっていこうと思っています。

國松知事　県の方が金のないときですから十分なことはできませんけれども、私どもも"くらし安心県"をつくりたいと思っていますから、大学と一緒によりいい仕事ができればと思います。

産官学の連携で進める医療・福祉の充実

小澤学長　ご存じかもしれませんが、3年後に人の全部の遺伝子がわかる時代が来ます。3年後には、医療体制とか、医療・医学の内容がすっかり変わると思います。そういうような状況で、今年滋賀医大に入った学生からそういう教育をどんどん始めております。

國松知事　こうした技術は見つかればすぐ全世界に波及するんですね。

小澤学長　科学技術庁も、そういう研究を大幅にサポートしようという形で予算を組んでいるのですけれども、まだまだ欧米には遅れをとっています。それが今度ベンチャービジネスで、企業もそれに一体となってくるから、経済界に対する影響も非常に強い。すごい波及です。

國松知事　"くらし安心県"をつくるということ、あるいは環境と福祉に力を入れていきたいのですが、福祉や環境を大事にしようとすればするほど、経済がしっかりしていないとそれができません。環境でいえば、環境と経済が今まで二者択一みたいな関係で考えられてきたけれど、そうじゃなくて環境と経済が一つにならないと、本当の環境問題の解決にならないのではないかと思います。

　福祉や医療も経済のベースに乗るところまでいかないとほんものにならない、特に健康・福祉では、技術の開発と、その技術が産業にもつながるということへ持っていく必要があると思っています。

　そういう意味でも、産・官・学の連携を単に治療行為だけでなくてビジネスとして、あるいはまた、医療をより確実なものにするための産業としてのバックグラウンドとして、滋賀がそういう役割ができればいいと思います。今までの日本は常に手本があったけれども、これからは手本のない時代に入ったので、あるときには自らモルモットになり、あるいはパイロットになって、勇気を持ってチャレンジしなければならない、そういう思いで"実験"という言葉を使っているわけです。

小澤学長　最近は龍谷大学も、福祉を精力的にやりだしていますね。

國松知事　はい。もともと滋賀県には滋賀大学一つしかなくて、ぜひ大学が欲しいといったときに、龍谷と立命という元気な大学が滋賀へ来てくれました。しかも今まで大学というと象牙の塔みたいなイメージで、大学の外からもそんな感じだったのですが、これは少子化現象と大学経営がサバイバル時代に入っているということもあると思いますが、滋賀に来ていただいた大学がいずれも地域にいかに貢献するかという非常にはっきりした哲学を持って来ていただきました。

小澤学長　この間、龍谷の上山学長とお会いしましたら、龍谷大学は臨床福祉、滋賀医大は実際医療面で、近々話し合いを進めようじゃないかというご提案をいただきました。

國松知事　近い場所にあるのですから、そういうようにつながっていけばおもしろいですね。

　龍大はもともと仏教の学校ですが、それが福祉と工業をされて、それをうちへ持ってこられたでしょう。この組み合わせが、滋賀県のいう福祉の実験にものすごく貢献するのではないか、福祉と医療と工業が組み合わさって、しかも宗教がベースにあるとなるとおもしろいんじゃないでしょうか。福祉というのは心だというけれど、それだけではいかん部分があるわけです。やはりそこに科学が入ったり、あるいはビジネスが入ってこないと、ほんものじゃないと思うんです。

　世界一長生きする国を日本はつくったんですが、老後なり、あるいは病気なりという不安を抱えている。あるいはまた、現実に家庭で支え切れなくて、その問題をどう解決するかというのは、やはり日本が実験台になってでも解決しないといけない課題だと思います。

　そういう意味では、滋賀医大の果たしていただく役割は大変大きいと思うし、幸い、滋賀のフィールドというのは、環境問題を考えるにしても世界一すばらしいフィールドだし、福祉も障害者福祉の分野において歴

SPECIAL TALK

開かれた医科大学を目指して

史的にものすごく取り組んできた場所です。

小澤学長　地域により以上に徹していこうということは、教授会において了承しておりまして、福祉にさらに力を入れた形にしていかなきゃならないと思っております。

國松知事　本来の業務分野のオーソドックスな部分ももちろんだし、また救急医療もそうですが、やはり福祉は、ぜひ滋賀医大の一つのトレードマークになるような形でやっていただけると、滋賀の願いと、あるいはまた滋賀の持っている歴史風土にも合うだろうと思うんです。

地域に根ざした大学、地域医療の推進に向けて

北嶋教授　高度先進医療というのに今年は2件通りまして、一つは悪性腫瘍の免疫療法ですけども、私どもを入れますと4大学です。これは癌細胞に対するリンパ球を増殖して、また患者さんに戻して抵抗力をつけようというものです。

もう一つは、耳鼻咽喉科から応募して通ったんですけど、甲状腺などの首の手術で、前頸部を切るかわりに脇の下などの目立たない部分に穴をあけて、そこから内視鏡を入れまして腫瘍を取るという手術です。モニターを見ながら、首をあけずに手術しようということで、これは私のところともう1カ所だけです。これも日帰り手術の中で十分できます。

これなども、いい機械がないと自分のところで開発しなければいけないので、工学部の先生とかと相談してやらなければと思います。

國松知事　新しい産業技術の開発も、滋賀医大の方がうまく企業を引っ張り込んでパートナーにしていただくといいですね。

滋賀県の企業は、二つおもしろい点がありまして、一つは他府県に比べると圧倒的に大手企業さんが多いんですね。これはなぜかというと、東西70キロの所に日本で第二、第三のマーケットがあって、製造基地をつくるなら地理的条件で滋賀県がものすごく有利なんです。だから、産業構造から言うと47都道府県で最も工業に特化した県なんです。

もう一つは、環境問題に滋賀県ががんばってきたことで、環境とか新しい分野に目覚めようとするところがあり、滋賀の地に一定の技術者を配置しておられる傾向があります。それに今言った元気な大学もあるし、県立大もある。だからこの辺がうまく連動すると、おもしろい文化ができるのではないかと思っています。滋賀医大もそういう意味では、ぜひ触媒の働きも含めてやっていただきたいと思います。

ちょうど節目でもあるし、この辺をお互いに確認し合いながら、パートナーとしてやれれば、滋賀県ほど素材に恵まれた県はないと思うんですよ。あとは、どう生かすかです。

47都道府県にある医大の中でも、やっぱり滋賀がひと味違うな、というような大学になっていただくことが県にとって幸せなんだし、またそのためにも大学と県とがお互いしっかりとパートナーシップを築くことが必要です。

北嶋教授　私は「病院だより」の編集委員長をしていますが、それは院内だけの広報誌で、肝心の一般県民向けのものが一つもないので、これはちょっと具合が悪いと思っていました。

私どもの大学は、建学の精神がもともと県民医療の推進ですから、今度、新しい媒体を作って、今、医大が何を考えているか、今後どうしていけばいいのかということを明かにしたいと思っています。

國松知事　やっぱり地域にどれだけ根づくか、もっと言えば、地域にどれだけ具体的に貢献できるかということでしょうからね。

北嶋教授　これからの大学の、特に医科大学の評価というのはまさしくそこにあるわけです。いくらいい論文を書いても、地域の健康のために具体的に役に立てないと、存在価値そのものが問われるような時代です。

小澤学長　平成12年度には国に評価機関ができて、全部の国立大学が評価されます。大学間で比較がなされます。大変厳しい時代です。

國松知事　すべての事業体がそういうことを受けなきゃいけない時代に来たということでしょうね。

本部も含めて滋賀にある大学は、滋賀医大と滋賀大と県立大学ですが、滋賀県にある大学は皆さん地元地域をものすごく大事にしていきたいというお気持ちなので、ぜひ輪を大きくできるように、小澤先生にもまたお力添えをいただければと思います。

小澤学長　新聞でいろいろと報道されていますように、独立行政法人化の問題があっても、根本は地域ということで判断しながら進んでいきたいと思っております。いろいろまたご相談に上がることもあるかもわかりませんが、どうぞよろしくお願いいたします。

きょうは本当に長い時間ありがとうございました。

國松知事　こちらこそ意見交換するいい機会をつくっていただき、ありがとうございました。

収録：1999年9月27日